

不登校予防の研究（中間報告）

－居心地のよいクラスづくりをとおして－

義務教育研修課 主任指導主事 阿部 浩士
高校教育研修課 指導主事 竹原 一典

はじめに

文部科学省が毎年実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において、不登校児童生徒を「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席したもののうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。

平成23年度の同調査結果によると、全国の小学校における不登校児童数は22,622人（0.33%）で、前年度比0.7%の増加であった。また、中学校における不登校生徒数は94,836人（2.64%）で、前年度比2.7%の減少であった。小学校の場合は、平成13年度の26,511人をピークに概ね減少傾向にあったが、平成22年度から再び増加傾向となっている。中学校の場合は、平成13年度の112,211人をピークに減少傾向となっている。

平成14年9月、文部科学省は不登校児童生徒が年々増加傾向にあることを深刻に受け止め、「不登校問題に関する調査研究協力者会議」を設置し、平成15年3月、同会議の報告内容に基づいて次の5つの視点から不登校への対応を行ってきた。①将来の社会的自立に向けた支援の視点、②連携ネットワークによる支援、③将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割、④働きかけることや関わりを持つことの重要性、⑤保護者の役割と家庭への支援である。また、学校における取組として、不登校とまらないための魅力ある学校づくりと不登校児童生徒に対するきめ細かく柔軟な対応について提言している¹⁾。

同提言には、不登校未然防止と不登校児童生徒支援の2つの観点が示されているが、従来は、施策面でも、また各学校の取組においても後者に意を用いてきた。不登校児童生徒に対する個別の支援の重要性は言うまでもないが、小さなつまずきから不登校状態に陥りかねない児童生徒の存在に着目すると、今後、不登校の未然防止を充実することが重要であると考えられる。

1 多可町との共同研究の取組

(1) 研究の目的

本県の不登校率（在籍児童生徒数に占める不登校児童生徒数の割合）は、小学校では平成18年度の0.25%から減少傾向にあったものの、平成21年度の0.22%を境として再び増加傾向となり、平成23年度には0.25%となっている。また、中学校では、平成20年度の2.77%をピークに減少傾向にあり、平成23年度は2.60%となっている。平成23年度の不登校率を全国平均と比較すると本県の不登校率は、小学校で0.08%、中学校で0.04%下回っているものの、依然として憂慮すべき状況にある²⁾。

さらに、不登校になったきっかけと考えられる状況について、本県の場合は、「不安など情緒的混乱」（小学校29.4%、中学校18.6%）が最も多く、以下、「無気力」（小学校22.2%、中学校18.3%）、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」（小学校10.1%、中学校17.0%）と続く。こうした状況は、「不安など情緒的混乱」や「無気力」といった本人に係る状況と、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」といった学校に係る状況に大別される。一般的に、前者には主にカウンセリングなどの個別支援が必要とされ、後者には学級集団や学校環境への働きかけが必要とされる。しかし、従来の不登校対策は、不登校傾向が懸念される児童生徒や不登校に陥ってしまった児童生徒に対する個別指導が中心となる傾向にあり、学級集団や学校

環境への働きかけには、工夫・改善の余地があると考えた。

そこで、本研究では、不登校予防の観点から「クラスづくり」「学年づくり」さらには「学校づくり」など、児童生徒の人間関係づくりを重視した不登校予防プログラム（以下、「予防プログラム」という）を開発することを目的とした。「予防プログラム」は、児童生徒自身が自分の所属する集団の人間関係をよりよいものにしようとする取組を支援することで、集団を対象とした指導を充実させ、児童生徒が安心して学べる学校環境づくりをめざすものである。その具体的な取組として、当所と多可町教育委員会による共同研究（図1）を実施し、多可町内の小学校7校、中学校3校と保護者、教育機関等が連携・協力してこの「予防プログラム」を活用できる環境を整えることをめざした。

同町では、不登校児童生徒数が平成22年度以降減少傾向にあるものの、小学校では問題なく登校している児童が、中学校に進学すると不登校に陥ってしまうケースが顕著に見られる。こうしたいわゆる中1ギャップによる不登校の解消に向けて、町内に1カ所設置された適応教室と連携しながら、町内全学校をあげて不登校支援に継続的に取り組んでいるところである。そこで、多可町立八千代中学校を研究実践校として、「予防プログラム」を実施し、プログラムの効果について考察するとともに、本研究の成果を広く県内に発信し、児童生徒の人間関係づくりを重視した「予防プログラム」を提案する。

(2) 研究の方法

「予防プログラム」の開発にあたっては、当所の心の教育総合センターが作成した「心の健康教育プログラム」³⁾ 所収の指導プランである「セルフマネジメント力を高める活動」「自己を理解する活動・他者を理解する活動」「コミュニケーション能力を高める活動」に基づいて、その内容を検討した。あわせて、「予防プログラム」の効果を考察するために、「予防プログラム」実施の事前、事後に生徒への調査を行った。また、心の教育総合センター職員が校内の不登校支援委員会（以下、「支援委員会」という）に参加し、当該児童生徒の個々の実態に応じた対処方法を検討するとともに、支援委員会の効果的な運営について専門的見地から助言を行った（表1）。

不登校生徒および別室登校生徒への個別支援については、支援委員会で、当該生徒の不登校状況について共通理解を図りながら、不登校生徒と家庭に対する支援の方向性を決定し、学校・家庭それぞれが果たすべき役割を確認し、多面的な視点での生徒理解と支援を行う。支援委員会は毎月1回、定期的に行われ、前回の委員会で提案された支援の効果や生徒の変容を振り返りながら、必要に応じて支援の方向性を見直し、以後の支援に結び付ける。支援委員会には、八千代中学校の不登校支援委員である校長、教頭、登校支援担当教諭、養護教諭、SC（スクールカウンセラー）、スクールラブ展開事業指導補助員、担任教諭が出席し、町内の中学校の不登校担当教員や当該生徒の出身校である小学校の教諭、SCにも出席を呼びかける。様々な立場から不登校生徒の状況把握や課題について情報の共有を図るとともに、こうした支援委員会の在り方を町内の各学校に発信する。

一方、八千代中学校の不登校予防の取組についての現状や「学校生活サポートアンケート（平成24年4月全校生徒対象に実施）」の結果から、生徒がSCに相談する件数が少ないことが分かった。同アンケートによると、困った時の相談相手として、SCを選ぶ生徒が全校生190名中、3年生1名、2年生0名、1年生4名と合計5名しかいないのが現状である。うち、3年生の1名は適応教室通級生徒である。また、「困った時にも誰にも相談しない」「我慢する」と回答する生徒も少なくない。現在、不登校状態にある4名の生徒は「誰にも相談しない」と回答しており、課題を抱えた生徒が誰にも相談できない状況に陥っていることが懸念される。生徒が学校生活をはじめとする日常生活で困った時、身近な誰かに相談することができる環境を整えると同時に、自分の抱える悩みや問題を相談することができる人間関係を構築することが課題である。

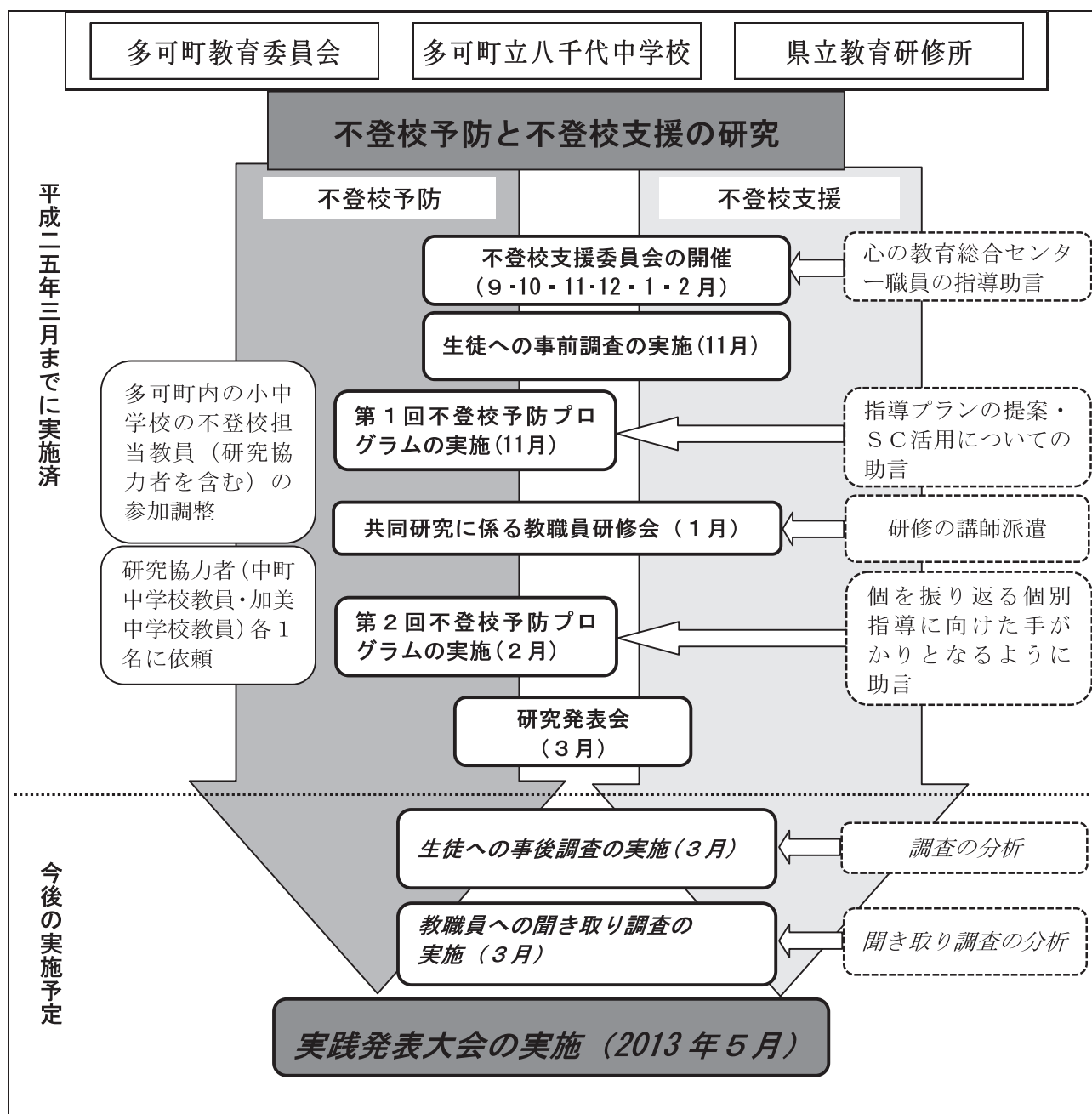


図1 多可町教育委員会との共同研究(概念図)

実施日	出席者
9月13日	多可町教育委員会指導主事、校長、登校支援担当教諭、SC、心の教育総合センター職員
10月11日、11月8日 12月8日、1月17日 2月14日	校長、教頭、登校支援担当教諭、養護教諭、SC、スクールラブ展開事業指導補助員、担任教諭、心の教育総合センター職員

表1 不登校支援委員会実施日および出席者

そこで、相談業務に携わっているSCと共同で立案した授業をTT(ティーム・ティーチング)形式で実施することによって、生徒がSCの存在をより身近に感じ、この人になら相談できるという気持ちを抱かせ、生徒が相談できる選択肢を増やすことをねらいとする。従来のSCは相談室で待機し、来談者に対して、個別にカウンセリングを行うことが一般的であった。しかしながら、SCが、困った時に相談でき

る存在となるためには、日頃から、学校生活全般において広く児童生徒と関わる場や機会を持つことが大切であり、いつでも、そして、何でも相談できる親しみやすい存在であることをアピールすることが必要だと思われる。

また、八千代中学校の教職員が自校の生徒に対して抱いている印象の一つに、自己開示を避けてできるだけ目立たないように振る舞おうとしていることが挙げられる。そのため、生徒一人一人のよさや個性が発揮されていない状況が少なからず見受けられるとの意見もあった。そこで、個々の生徒が育つ基盤となる居心地のよいクラスづくりに取り組むことをねらいとし、「心の健康教育プログラム」に基づいて、「予防プログラム」を開発・実施することで、生徒相互の信頼関係の構築や、生徒のよさや個性の発揮などの観点から、その効果について考察する。

2 多可町と連携した不登校「予防プログラム」の実施

(1) 事前調査の実施

「予防プログラム」の実施にあたって生徒の実態を把握し、その効果を測る目安として、学校環境適応感尺度 アセス (ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres) (以下、「アセス」という) を用いた⁴⁾。

「アセス」とは、いじめや不登校の予防等、児童生徒の学校適応支援を進めるために用いられる学校環境適応感尺度を測る調査であり、具体的には「生活満足感」「学習的適応」「対人的適応（教師サポート・友人サポート・向社会的スキル・非侵害的關係）」から、学校適応感を捉えようとするものである。

今回の共同研究では、第1回不登校予防プログラム前（平成24年11月）と第2回不登校予防プログラム後（平成25年3月）にそれぞれ「アセス」を実施し、事前と事後の結果の比較検討を行うことにより、「予防プログラム」の効果について考察する。

(2) 事前調査の分析

図2は、八千代中学校のあるクラスで、11月に実施した「アセス」の学級内分布表である。この表は、生徒の適応状態が「●」や「◆」で示されており、生徒個人の学級内での相対的な位置を把握するとともに、学級全体の傾向を捉える上で有益な情報となり得る。グラフの縦軸は「対人的適応」、横軸は「学習的適応」であり、数値が高いほど学校での生活に適応的であることを示している。「アセス」では、偏差値と同様に50がほぼ平均になるように作成されており、40を下回るようであればそれぞれ適応に課題があると推測される。すなわち、適応していない生徒ほど、グラフの左下に位置することとなる。

また、「生活満足感」が低く、支援を必要とする生徒は「◆」で示される。例えば、このクラスにおいて支援の必要性が高い生徒は、生徒①、生徒②の2名である。これらの生徒の個人特性は、6つの適応感（「生活満足感」「学習的適応」「対人的適応（教師サポート・友人サポート・向社会的スキル・非侵害的關係）」に基づいて、レーダーチャートで

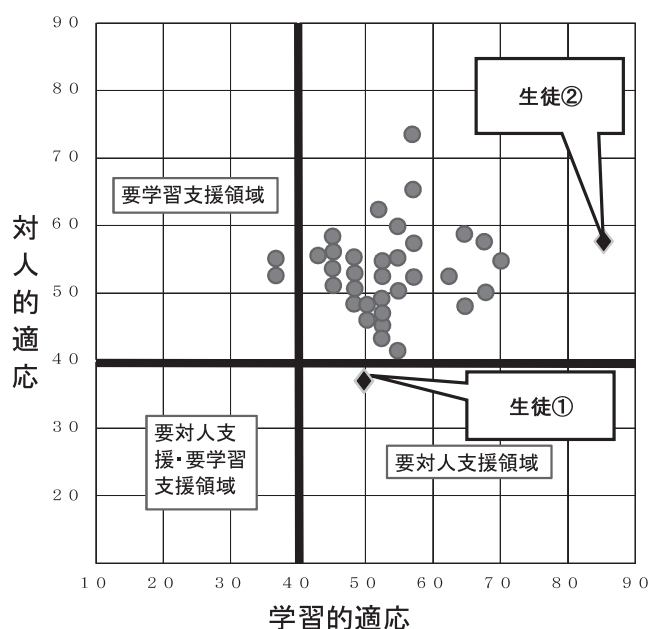


図2 「アセス」の学級内分布表

表される（図 3、図 4）。これらによると、生徒①は、「対人的適応」が40を下回っており（図 2）、「教師サポート」が32、「友人サポート」が31、「向社会的スキル」が34と低く、教師だけでなく友人との関わりもあまり見られない。「生活満足感」も37であり、学校生活全般に対して満足感を得られていない（図 3）。

生徒②は、学級内分布表の右上に位置し（図 2）、「対人的適応」「学習的適応」いずれも平均値50を上回っており、一見、支援の必要はないと思われる。しかし、各項目を見ると、「教師サポート」が34と低く、教師

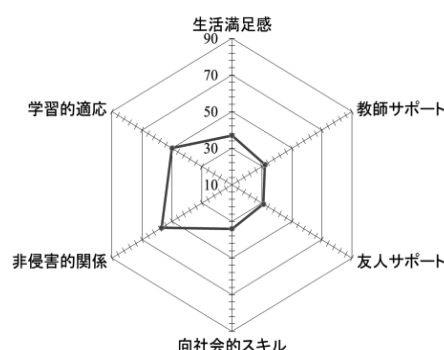


図 3 生徒①の結果

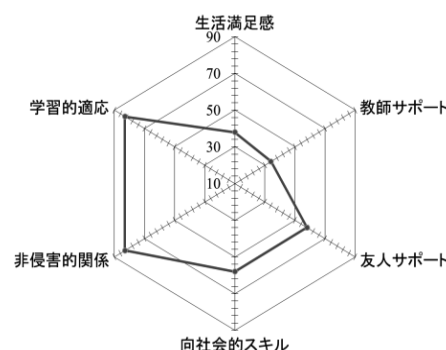


図 4 生徒②の結果

からの支援が希薄であると感じていることが分かる（図 4）。

以上の「アセス」の結果から、適応に課題がある個々の生徒に対して適応状況の改善に向けた具体的な支援を行うことは言うまでもないが、全体指導の中で、教師が生徒に働きかけ、よりよい人間関係づくりを支援し、生徒相互の関係性の中で、生徒が自らの力で適応状況を改善することができるような取組を考えた。

第 1 回不登校予防プログラムでは、クラス全員を対象として、学校不適応児童生徒を出さない未然防止の観点から授業プランを立案する。第 2 回不登校予防プログラムは、「アセス」の結果を踏まえて、ペア活動などをおして自分自身を振り返り、今後の個別指導に向けた手がかりが得られるような授業内容を全体指導（授業）の中で行うこととした。また、それぞれの授業においては、支援を必要とする生徒の状況を考慮しながら、教師が適切な声かけをするなど配慮する。

(3) 第 1 回不登校予防プログラムの実施

第 1 回不登校予防プログラムの実施に際し、前述のように S C の効果的な活用をねらいとして、教師と S C が T T 形式の授業を行うことを検討した。授業を T T 形式とすることで、生徒に対して S C の存在をアピールするとともに、生徒が S C に相談しやすい環境づくりをめざした。

ア 授業の目的

授業では、心の健康維持の大切さに気付かせ、毎日をご機嫌に過ごす工夫について理解を深めることをねらいとした。「ご機嫌よう」という挨拶は「ご機嫌いかがですか」「これからもご機嫌よくいてくださいね」など良い人間関係を象徴する言葉で、このように互いを思いやることができるクラスは生徒にとって居心地のよいクラスであると思われる。そのような環境を整えることにより、一人一人の児童生徒の力を発揮させることが可能となると考えられる。授業のポイントは表 2 のとおりである。

- ・ご機嫌に過ごす方法は、知らず知らず身に付けていることを理解させる。
- ・ご機嫌に過ごす方法には、誰にでも共通するものと、人それぞれに異なるものがあることを理解させる。
- ・自分に適した新しい工夫や対処方法を発見し、ご機嫌に過ごすための意欲を高めるきっかけにさせる。
- ・困難な状況に直面したら、自分で抱え込まず、周囲に相談することで、解決の糸口が見つかることを理解させる。
- ・S C の役割を生徒に周知し、何でも相談できる存在であることに気付かせる。

表 2 授業のポイント

イ 授業プラン

対象者	2年2組	所要時間	50分
テーマ	ご機嫌に過ごすための工夫	実施期日	平成24年11月15日(木)3校時
準備物	プロジェクター、PC、模造紙、付箋、マジック、提示用カード		

学習活動	教師(T)・SC(S)の働きかけ	留意点
1 本時の目標を知り、学習の見通しをもつ。 	S 心の健康を維持することの大切さを説明する。 T これまでの生活経験から、心の健康を維持するための工夫を想起させる。	心の健康を維持するための工夫をすでに身に付けていることに気付かせる。
2 自分の経験を振り返り、「イライラした時」や「落ち込んだ時」の気分転換の工夫や対処方法を記入する。	TS 付箋に工夫や対処方法を記入させる。 「イライラする時」は赤の付箋 「落ち込んだ時」は青の付箋	- 教師やSCが工夫や対処方法を紹介することにより、生徒が自分自身の工夫や対処方法に気付きやすくする。 - 思いついた工夫を自由に記入させる。
3 (1) 各自の工夫や対処方法を、班ごとに発表し合う。 (2) 発表し合った後、新たに気付いた対処方法を付箋に記入する。 	TS 班活動が円滑に進むよう班ごとに助言する。 S できるだけ多くの対処方法を考えさせる。 	- 人によって様々な対処方法があることに気付かせる。 - 発表した対処方法を否定しないように注意する。 - 対処方法の発表が少ない班に助言する。
(3) 共通する対処方法をグルーピングし、見出しをつける。	S 自由な発想でグルーピングさせる。	付箋の色にとらわれることなく、グルーピングするよう指示する。
4 (1) 各班の代表者がグルーピングの結果を発表する。 	TS 発表に対してコメントする。 TS 発表された対処方法を自分が行うと、どうなるのかを考えさせる。	- SCは心理学的な知見に基づいた専門的なコメントを加える。 - 生徒の具体的な発表内容を取り上げながら考えさせるようにする。

(2)各班の発表から、誰にでも効果がある対処方法と人によって効果がある対処方法があることを知る。	S 発表された対処方法の効果についてS Cが解説する。	
	S 「イライラした時」や「落ち込んだ時」に身体に表れる反応について考えさせる。	・身体と心は互いに影響を及ぼすことを伝える。 ・感情が揺れ動くことは、自然な反応であることを理解させる。
(3)様々な対処方法を身に付けることが、心の健康維持につながることを知る。	S 心の健康維持のための対処方法を説明する。	・周囲に不快感を与えるような対処方法については、それに代わる対処方法を考えさせる。
(4)相談することが効果的な対処方法の一つであることを知る。	S S Cの役割を説明する。 	・相談することの大切さを伝える。 ・S Cは生徒にとって身近な存在であるということを押さえる。
5 本時の学習を振り返り、感想を書く。		

ウ 授業の流れ

第1回不登校予防プログラムは、公開授業として実施した。当日は、同町内の各小・中学校の生徒指導担当者・不登校支援担当者が参加し、公開授業の後、参加者による意見交換を行った。

公開授業では、まず授業者が本時のねらいを示し、S Cが心の健康を維持することの大切さを説明した。次に、学年団の教師5人が、「イライラした時」や「落ち込んだ時」の対処方法を紹介することで、生徒に本時の学習のイメージをつかませた。そして、生徒は自分の経験を振り返りながら、「イライラした時」や「落ち込んだ時」に、どのようにして気持ちを好転させているのかを考えた。続いて、「イライラした時」の対処方法を赤い付箋に、「落ち込んだ時」の対処方法を青い付箋に記入した。班ごとに各自の対処方法を発表し合い、似通った対処方法をまとめて、グルーピングを行い、見出しをつけて整理した。その結果が表3である。

寝る系	寝る・何もしない・丸くなる
アカン系	友だちに愚痴る・永遠に愚痴る・物にあたる
テレビ系	テレビをボーっと見る・ゲームをいっぱいする
発散系	部屋で叫ぶ・暴れる・散歩する・サッカーをする
音楽系	音楽を聴く・洋楽を聴く・歌いながら走る
孤独系	一人になる・泣く
その他	何でもいから踊る・好きなことをする・プチプチ（荷物梱包用の緩衝材）をつぶす

表3 生徒のグルーピング例

図5のように模造紙にまとめて各班が発表した後、それぞれの対処方法について気付いたことを発表した。話し合いの結果、「イライラした時」や「落ち込んだ時」の対処方法には、誰にでも共通する点が多い

ことがわかった。また、中には個性的な工夫もあり、自分でも試してみたいという意見などもあった。一方、周囲に不快感を与える対処方法については、八つ当たりによる憂さ晴らしは気分を好転させるどころか、さらにイライラを募らせたり、気分を落ち込ませたりするという意見が出た。これについては、上手なセルフマネジメントのための工夫について説明し、それに代わる対処方法を考えさせた。

今回の授業のまとめとして、思春期の生徒たちにとって、感情が大きく揺れ動くことは、特別なことでも異常なことでもなく、発達段階からして当然のことであることを伝えた。心の健康を維持する工夫には、様々なバリエーションが考えられ、誰にでもその効果が現れる普遍性のある工夫と、自分の趣味や嗜好を反映した独自の工夫があり、人それぞれ、また状況によって、効果をもたらす工夫があることを確認した。そして、ストレスマネジメントの手法をより多く知ること、日常生活の中で、様々なストレスを感じた際や困難に直面した際にも、心の健康が保ちやすくなることに思い至らせた。加えて、どのような工夫をしても心が落ち着かない時には、教師やSCに相談するという対処方法があることを伝えて授業を終えた。

公開授業の後の研究会では、参加者から表4のような感想や意見が出された。

- ・自らの感情の変化に、子どもたち自身が気付くことが大切である。今回、SCがTTを行うことで、SCの存在が生徒にとって身近に感じられるようになった。自らの考えが全体に発表されることで、授業に参加している満足度も向上したと思われる。
- ・普段の学校生活の中で、自分自身を振り返ることが大切である。また、友だちの考えを聞き、考えることができていた。
- ・SCが授業に加わることで、子どもたちのSCに対する親近感が強まった。ただ、不登校傾向にある児童生徒は誰にも相談できない状態が多いので、普段からSCとの関係を築いておくことが大切である。
- ・小学校から中学校に進んだ子どもが不登校になっていることを聞くと、小学校で何かできることがあるのではないかと思う。
- ・教師だけで授業を進めるのではなく、SCとのTTが効果的だった。TTというスタイルをとったことで、多面的な授業へのアプローチができていたと思う。
- ・SCへの相談を、問題があった時だけに限定するのではなく、今回の授業のように、予防的取組において連携することで、不登校対策についてより効果が上がると思う。

表4 第1回不登校予防プログラムの授業参観者の主な意見

今回、SCが授業の指導案の作成から関わり、その専門的知識を授業に反映させることによって内容の充実を図るとともに、生徒たちにとって、SCを身近な存在と感じさせることができた。授業後、生徒と

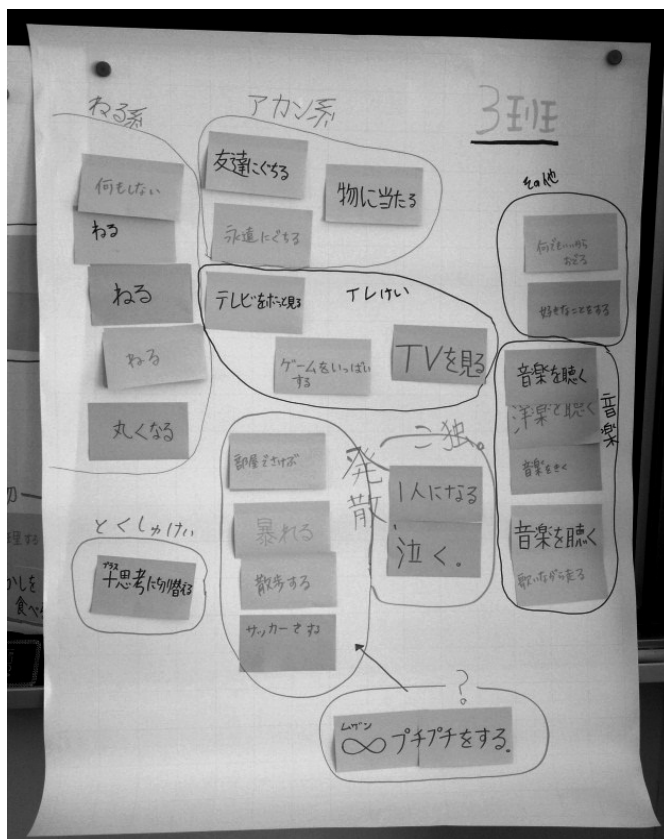


図5 生徒のグルーピング例

ＳＣが廊下で立ち話をするなど、これまではあまりなかった関わりが見られるようになった。

ＳＣは、相談室で生徒や保護者を対象とするカウンセリングを行うだけの存在ではなく、授業等で積極的に生徒と関わることをとおして、話しやすく相談しやすい存在となることがわかった。また、このことによってＳＣの相談業務の効果が高まることが期待される。今回の実践が、今後、学校現場でＳＣのさらなる活用に向けたモデルケースの一つとして提示できたものとする。

(4) 第２回不登校予防プログラムの実施

第２回不登校予防プログラムでは、ＳＰ(Sub Personality)トランプを用いて、自己理解と他者理解を深めることをねらいとした。

ＳＰトランプ（図６）には、トランプに模した52枚のカードに、日本人の多くが持っているサブ・パーソナリティ（人間の持つ様々な面）がユーモアあふれる挿絵とともに表わされている。「ハート」「ダイヤ」「クラブ」「スペード」のマークや１から13までの数字に意味付けがなされているので、選んだカードにより自分自身のサブ・パーソナリティに気付くきっかけとすることが期待できる（図７）。また、選んだカードを自分自身のパーソナリティ（性格）を表すように形を工夫して並べることで、自分自身について振り返ることができる。



図６ ＳＰトランプ

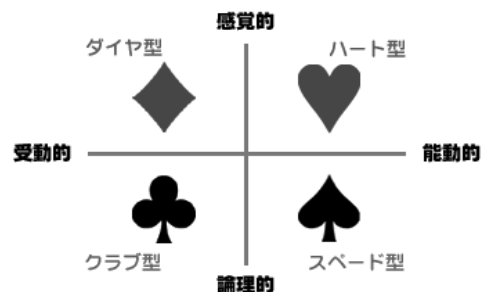


図７ ＳＰトランプマークの分類

ア 授業の目的

自分自身を振り返り、ＳＰトランプを用いて、自分の中のサブ・パーソナリティを知る機会とする。日頃、自分では意識していないサブ・パーソナリティに気付く、自分自身についての理解を深め、自分の好むサブ・パーソナリティだけに注目するのではなく、好まないサブ・パーソナリティも抑えついたり否定したりする必要のないことを知らせる。

また、他者との関係がうまくいかない時には違うサブ・パーソナリティを見つけて育てることにより、その関係が改善される場合もあることに気付かせる。自分の弱いサブ・パーソナリティをカバーしたり、足りないサブ・パーソナリティを育てたりすることで、自分や他者について考えるきっかけとなることをめざす。

イ 授業プラン

対象者	２年１組	所要時間	５０分	
テーマ	自己理解と他者理解		実施期日	平成25年2月21日(木)2校時
準備物	プロジェクター、ＰＣ、ＳＰトランプ、ＳＰ整理表			

学習活動	教師の働きかけ	留意点
1 (1) 本時の目標を知り、学習の見通しをもつ。	ＳＰトランプの使い方を説明する。	必要に応じて、ＳＰトランプに関する用語を説明する。

(2) ペアの1名が 52 枚の S P トランプの中から、自分のサブ・パーソナリティを表すと思うカードを 10 枚選ぶ。 (3) 10 枚のカードを自分のパーソナリティを表すような形に並べ、相手に説明する。 (4) 選んだカードを S P 整理表に記入し、どのマークが多いかチェックする。  (5) S P トランプのマークと数字が表すパーソナリティの傾向を知る。 (6) 役割を交代して、同様の活動を行う。 (7) ペアで S P 整理表を交換し、相手のサブ・パーソナリティに合うと思うカードを探す。	- 自分のサブ・パーソナリティを表すカードをすべて選ばせた後、10枚に絞り込むように指示する。 - 自分のパーソナリティを表すような形を考えさせる。  - 選んだカードのマークと数字から自分のパーソナリティの傾向に気付かせる。 - 選んだカードは自分のパーソナリティの一つの面を示すものであり、それが全てではないことを知らせる。 - 相手が選んだカードとその理由から、自分自身では気付かなかったサブ・パーソナリティを考えさせる。	- ペアで話し合いながらカードを選ばせる。 - 相手の選んだカードを否定しないよう注意する。 - カードの並べ方が思いつかない生徒には並べ方を例示する。 - プラスに感じる面とマイナスに感じる面の両方が自分に存在することを確認させる。 - ある一面だけを捉えて相手のパーソナリティを判断していないかどうか振り返らせる。
2 自分が選んだ 10 枚のカードを、自分の好むカードと、好まないカードに分類する。	これまで意識しなかったサブ・パーソナリティがどんな時に現れるのかを話し合わせ、自分自身の気付きを深めさせる。	自分の好まないサブ・パーソナリティを受け入れることが、自己理解につながることに気付かせる。
3 自分にはないと思っていたサブ・パーソナリティや今後身に付けたいと思うサブ・パーソナリティについて考える。		他者との関係がうまくいかない時には、違うサブ・パーソナリティを見つけることで、うまく対応できることを知らせる。
4 本時の学習を振り返り、感想を書く。		

ウ 授業の流れ

第2回不登校予防プログラムも、第1回と同様に公開授業として実施し、公開授業の後、参加者による意見交換を行った。

この授業では、ペアを組んで、S Pトランプを用いた活動を行った。最初に52枚のS Pトランプの中から、自分のサブ・パーソナリティを表していると思うカードを全て選び、その中からさらによく自分を表していると思う10枚のカードに絞り込んだ。活動の過程で、ペアの相手に「自分はこんな性格かな」「そんな性格だよ」と互いに話しながら、活動を続ける様子も見られるなど、相手を意識しながら自分自身について考えている様子が伺えた。その際に、相手の選んだカードを否定しないように伝え、よりよい関係づくりの機会となるように配慮した。

次に、生徒は、絞り込んだ10枚のカードを使って、自分自身のパーソナリティをイメージ化し、思い思いの形で表現した。カードの並べ方が思いつかない生徒には、授業者が、自分のパーソナリティを強く示していると感じるカードから順に、ピラミッド型に並べる方法を例として示した。生徒は、自分が選んだカードとその並べ方について相手に説明する中で、自分自身のパーソナリティについての気づきを自分の言葉で表現することをとおして深めた。続いて、自分のパーソナリティの傾向を考えながら、選んだカードをS P整理表に記入した後、ペアの相手とS P整理表を交換し、相手に当てはまるサブ・パーソナリティについて話し合った。そして、自分にはないと思っていたサブ・パーソナリティや、今後身に付けたいと思うサブ・パーソナリティについて考え、改めて自分自身についてじっくりと振り返った。

今回の実践では、自分のサブ・パーソナリティに気付くことで自己理解を深め、他者の言葉に耳を傾けることが他者理解につながることを確認した。思春期にあたる中学生は、自分を必要以上に意識し、よく見せようとする心理から、自分の内面について他者に話すことを嫌がる傾向が見られる。しかし、S Pトランプを活用して会話のきっかけを与えることにより、ペアとなった生徒相互で自分のパーソナリティについて抵抗感なく話すことができた。また、それぞれが持っているサブ・パーソナリティを認め合ったり、これまで意識していなかった自分のサブ・パーソナリティを見出したりすることで他者との関係が良好になる場合があることを説明して授業を終えた。

公開授業の後の研究会では、参加者から表5のような感想や意見が出された。

- ・1回目の公開授業のときよりもクラスの雰囲気がよく、人間関係ができていたと感じた。
- ・中学生が自分のことをオープンに話すのは難しいと思うが、ペアで互いによく話ができていた。生徒にとって自分を振り返ることができる時間になっていた。
- ・自分や相手の一面しか見えなくなったときに、不登校やいじめが起きるのではないかと。自分の表面に出てこない性格に気付くことが大切だと考える。
- ・自分自身で思っている性格と、友だちが感じている性格が必ずしも同じではないことを理解することが大切である。
- ・S Pトランプを用いて他者の意見を聞くことで、生徒は自分の性格を客観的に見つめ直すことができたと思う。
- ・これまでにない斬新な授業で、生徒も楽しんで活動していたと思う。
- ・ペアになった生徒だけでなく、学級全体が受容的なとてもよい雰囲気であった。
- ・今回の授業は、生徒にとって自己理解につながる貴重な経験となったと思う。進路指導等においても、このような自己理解の経験が生かされていくのではないかと。
- ・今回の活動が、さらに多くの友だちと人間関係を築いていくきっかけとなったと思う。

表5 第2回不登校予防プログラムの授業参観者の主な意見

おわりに

(1) 不登校予防プログラム実施の結果

第1回不登校予防プログラムでは、教師とSCが協力して立案したTT形式による授業を実施した。そのことにより、SCが生徒にとってより身近な存在として意識されるようになり、教育相談等の機会だけでなく、授業や日常生活においてSCが生徒との関わりを持つことが増えた。こうした関係を構築し、生徒がSCに相談しやすい雰囲気を校内に醸成することが、不登校を予防する効果的な取組となると考える。

第2回不登校予防プログラムでは、第1回で、心が落ち着かない時には、誰かに相談するという対処方法があることを生徒に伝えたことを受けて、SPトランプを用いることで自分のパーソナリティについて生徒が話しやすい状況を整えた。また、ペアワークで相手の意見を聴くことによって、自己理解と他者理解が深まるように、活動内容を工夫した。

(2) 今後の取組

八千代中学校では、人間関係を構築することの大切さを実感した生徒の発案により、「話そう週間」の実施を計画している。生徒の主体性を生かし、生徒会の呼びかけにより学校全体で取り組むこととしている。さらに、保護者と連携することにより、家庭や地域にも「話そう週間」を広げようとしている。このように授業をきっかけに、そこで学んだことを学校生活にとどまらず、家庭や地域に発信し、日常的な取組として発展させていくことは、今後の不登校予防の在り方を考える上で意義深いものである。

最後に、本研究に御協力いただいた多可町立八千代中学校及び多可町教育委員会の皆様に心より感謝したい。

注)

- 1) 文部科学省『不登校への対応について』, 2003
- 2) 兵庫県教育委員会『平成23年度兵庫県下の公立学校児童生徒の問題行動等の状況について』, 2012
- 3) 兵庫県立教育研修所 心の教育総合センター『心の健康教育プログラム』, 2012
- 4) 栗原慎二・井上弥『アセスの使い方・活かし方』, ほんの森出版, 2011

<参考文献>

- ・畠瀬稔他『人間中心の教育』, 星雲社, 2012
- ・八尾芳樹『人間力を高める！セルフ・エンパワーメント』, 東京図書出版, 2007
- ・吉澤克彦他『エンカウンター・エクササイズ12か月 中学校』, 明治図書, 2011
- ・富永良喜『ストレスマネジメント教育』, 北大路書房, 2000
- ・國分康孝『エンカウンターで不登校対応が変わる』, 図書文化, 2010

本研究は、「財団法人教育研究振興会『教育の喫緊の課題に対応した研究助成』」の支弁を受けた。